# ④勤続25年を超えた職員編

（令和6年度　岡崎賞受賞職員）

25年前、就職当時の配属は移転前のセンター野洲でした。当時は初めて知ることばかりでたくさんの迷惑をかけながらも学んだことが今になって、何より一番の自分の中心になっているように思います。

これまで多くのことを教えてもらいましたが、なぜか印象に残っていることは「サボりかた」でした。今思えばこれは「適度に肩の力を抜くことの大切さ」かなと思います。ずっと力が入りっぱなしだと疲れてしまいますよね。

これまで多くの利用者さん、職員と出会い、思いや考えを知っていくことができました。そこで学び繋いできたことが、今の自分の支えであり仕事ができてよかったと思えることです。

これからの抱負、目標は、体に気を付けてみんなと楽しく過ごせたらいいかなと考えています。

林　荒野・生活支援員・26年目
びわこ学園医療福祉センター草津

就職当初の思い出は、就職して数ヶ月経っているにもかかわらず、数名の職員に実習生だと思われていたことです。自分の未熟さを実感したとともに早く職員と認めてもらえるよう成長しなければという思いにもなりました。

その中で、印象に残っているエピソードとして、病棟職員の前では元気に声を出していた利用者さん。関わりが少なかった私がホームに入ると急に黙り込んでしまって、目をそらされていましたが、担当になってからは、顔を見ると声を出して呼んでもらえるようになったり、隣りに座ると肩を組んでくれるほど距離が縮まるなど、やりがいを感じたひとときでした。

これからも身体に気をつけながら、日々の仕事に向き合いたいと思います。

藤井宏美・作業療法士・26年目・リハビリ課係長
びわこ学園医療福祉センター草津

野洲市の南桜にあった第二びわこ学園は、外来・リハ室はプレハブ、管理棟のトイレは出入り口が男女共有で簡易な敷居で仕切られているのみ、一年中窓が開いていて冬場は極寒のトイレでした。西棟の職員用トイレも利用者さんが「うーうー」声を出しながら排泄している壁を隔てた隣だったので、どちらのトイレに行くべきか悩んだものでした。

最初の3年ほどは常に退職を考えていましたが、エネルギーに溢れた利用者さんと個性的な職員に囲まれ、野洲での20年間は私にとってかけがえのないものになりました。湖水浴、運動会、自立に向けての宿泊棟宿泊、コンビニ外出、畑、散歩、プール、焚火に山登り、シイタケの菌打ちたくさんのことを利用者さんと経験し、語りつくすことができません。

これからも常に「そのときできることをできるだけ」頑張ります。

加納雪絵・作業療法士・26年目
びわこ学園医療福祉センター草津

今年度、25年勤続ということで、「岡崎賞」を頂きました。びわこ学園との出会いは、学生時代に友人に誘われて就職見学に来たことから始まりました。見学は、びわこ学園を知らずに友人任せで来園し、当時のセンター野洲リハ課長の楽しいお話を聞いたことを覚えています。

就職してからは、日々しんどさもありましたが、1年1年楽しかった出来事が「勤続」を支えてくれたように思います。利用者さんとの笑顔を共有したいという思いと、利用者さんから学ばせて頂いた25年間は宝物です。これからも、さらに実現できるように、利用者さんのリズムに合わせた関わりを、仕事を続けていきたいと思います。

阿部真由子・作業療法士・26年目
びわこ学園医療福祉センター野洲

びわこ学園では勤続25年を迎えた職員に対し、永年勤続賞としてびわこ学園の発展に生涯をかけ尽力された初代園長岡崎英彦先生の遺徳を記念した「岡崎賞」を贈呈しています。
ここでは、本年度岡崎賞を受賞した職員の投稿をお届けします。

「京都に行くわ！」と友人に話し、びわこ学園から送られてきた書類に「滋賀」と書いてあるのを見て混乱したあの日から26年が経ち、このような賞をいただけるまで育てて下さった利用者さんをはじめ、多くの方に心から感謝致します。
この間、公私ともに様々なことがあり、「いのち」について考える機会が何度もありました。お別れは悲しいものですが、それだけではない思いをここびわこ学園では感じることが出来ました。それはすごく「有難い」ことなのだと思っています。
「有難い」とは「有ることが難しい」ということ。何気ない当たり前のような日々でさえも、実は「有ることが難しい」のだということも利用者さんに教えてもらいました。そんな日々に「ありがとう」（有難う）と感謝し伝えることができる人になりたいものです。
残りの人生も「いのち」に感謝しながら歩んでいきたいと思います。

吉田昌佐美・看護師・26年目・看護部長
びわこ学園医療福祉センター野洲

「今年度岡崎賞を受賞する」と聞いた時に、臨時職員として学園で働き始めた時に先輩職員が受賞したのを思い出しました。その時はすごい経験を経てきた先輩だなと思っていたのに、いざ自分が受賞すると入職して時間が経ったことに驚き、いろんな経験を積めてきたかなと不安を感じました。
入職して以降センター草津、センター野洲と働き、各病棟の利用者さんに久しぶりに会っても覚えていてくれることに喜びを感じます。その中でも利用者の方々と過ごしながら、加齢を実感してきました。日々のかかわりの中で利用者とのいろんな別れや出会いがあり、どのような生活を支援できるかと改めてたくさんの事を考えることがたくさんありました。今後も利用者にとって日々の生活とはどういうものなのかを考えながら、笑顔を見せて頂けるようにかかわっていければと思います。

野並弘恵・生活支援員・26年目
びわこ学園医療福祉センター野洲

この度は岡崎賞を頂きありがとうございます。気がつけば25年。入所に14年、地域で11年。最初の配属先は、第二びわこ学園の西棟という医療的ケアの必要な方の多くおられる病棟でした。建物は老朽化していましたが、日々の暮らしの中で利用者の持っている力を僅かでも活かせる工夫や自信につなげる取り組みなど先輩方の熱い思いを感じました。また利用者を側で優しく見守ったり、冗談を言うなど家庭的で温かい雰囲気も印象的でした。先輩方の利用者に向き合う姿勢や関わり方に自分もそんな風になれたら、と思いながら仕事を続けてきました。
入所でのそうした経験が利用者支援の原点となり今に活かされています。びわこ学園で感じた魅力ややりがいを伝えることがこれからの役割であり、お返しになると感じています。

山口俊一・生活支援員・26年目・支援課課長
知的障害児者地域生活支援センター

びわこ学園に初めて来たのは非常勤職員の採用面接でした。見学中にプレイルームからあいさつの歌が聞こえてきて「歌なんて無理！やっていけるのだろうか？」と思ったのが第一印象でした。その際、バイト先の先輩に相談すると、元びわこ学園職員であることが判明！し、背中を押していただきました。
その後、正規職員になり、センター草津で14年、障害者支援センターで11年。今、実感しているのは、どこで暮らしていても、目の前にいる利用者の方を「本人さんはどう思っているのだろうか」と悩みながら支援することは変わらないこと。そして、たくさんの人に重症心身障害者のこと、びわこ学園のことを知ってもらう必要があることです。
「たいよう」に異動後は、琵琶湖沿いを自転車通勤できる最高の環境で勤務しています。初めてびわこ学園に来た時に思った「びわこ学園なのに琵琶湖が見えない問題」は個人的に解決できました。

川島　洋・生活支援員・26年目・通所課課長
びわこ学園障害者支援センター